

日本とインドネシアの農山漁村で展開するサービスラーニング・プログラムの試み 異文化交流を通じた地域未来づくり

愛媛大学 SUIJI 推進室准教授 島上 宗子



愛媛大学国際連携推進機構准教授 小林 修



1. はじめに

モノ・ヒト・カネ・情報のグローバル化が進展し、インターネットを通じて誰もが世界中の情報にアクセスできるようになった。格安航空会社を使えば、国内旅行よりも安価に海外に出ることさえ可能だ。一方で、海外に留学する日本人学生数は2004年以降、減少に転じ、海外勤務を希望しない新入社員が増加しているなどの報告から、日本の若者の「内向き志向」が問題視されてきた。国内に目を向ければ、地方の過疎化・高齢化問題はさらに深刻化している。こうした状況下、大学や高校の教育現場では、「グローバル人材の育成」と「地域に貢献する人材の育成」を急務として、様々な事業が展開されている。

愛媛大学では、香川大学、高知大学とインドネシア3大学（ガジャマダ大学、ボゴール農業大学、ハサヌディン大学）と連携し、文部科学省の「大学の世界展開力強化事業」の採択をうけ、2013年度から、SUIJI サービスラーニング・プログラム（以下、SUIJI-SLP。SUIJIはSix-University Initiative Japan Indonesiaの略）を本格始動させた。SUIJI-SLPは、日本とインドネシアの6大学の学生が、四国とインドネシアの農山漁村にそれぞれ約2週間、共に滞在し、農山漁村が直面する課題解決に貢献する活動に取り組みながら学ぶプログラムである。グローバル人材の育成を、農山漁村というローカルな現場で、まさに土にまみれながら追及している点に、SUIJI-SLPの特色がある。

本稿では、SUIJI-SLPのこれまでの取り組みを紹介し、異文化交流を通じた地域の未来づくりの可能性について考えてみたい。

2. SUIJI-SLPの枠組み

SUIJI-SLPには、異文化交流を促しながら実践的に学びあう、いくつかの仕掛けがある。すなわち、1) 農山漁村というローカルな現場で、日本とインドネシアの学生が学びあう、2) 学生は原則として、日本とインドネシアの両方のサービスラーニングに参加する、3) 地域の課題解決を目指した活動を計画し、実践する中で学ぶ、4) 全学部の学生が履修可能で、学部の異なる学生が共に学びあう、5) 専門教育ではなく、主に1～2年の初年次共通教育として位置づけられる、6) ベーシックとアドバンスドのレベルを設け、希望する学生は再度同じ実習サイトで実践できる、7) 実習サイトは変更せず、学生が毎年通うことで活動を深める、である。

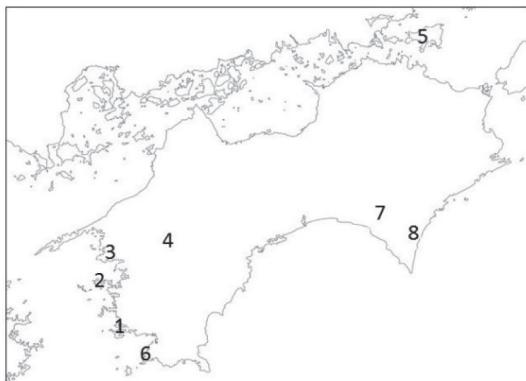
国内サービスラーニングでは、これまで毎年、日・イ6大学から計100名あまり（うち約40名がインドネシア学生）が四国の8ヶ所の実習サイトに分かれて活動し、海外サービスラーニングには、毎年計120名（うち約50名あまりが日本学生）がインドネシアの農山漁村5サイトにわかれて活動している。

以上のような枠組みの下、進められてきたSUIJI-SLPは、学生にいかなる学びを与え、地域に何をもたらしているのか。次節では、重要と思われるいくつかの側面を、学生の成果物などから拾い出しながら、みていこう。

3. SUIJI-SLPを通じた学びと変容

3-1. 動機

「私は人文学科に所属しており、一次産業はこれまで関心を持ったことのない分野でした。また、(中略) インドネシアに行くということは考えたことさえありませ



- 1. 銭坪 (愛媛県愛南町)
- 2. 蔣淵 (愛媛県宇和島市)
- 3. 明浜 (愛媛県西予市)
- 4. 高川 (愛媛県西予市)
- 5. 小豆島 (香川県)
- 6. 柏島 (高知県大月町)
- 7. 安田 (高知県)
- 8. 室戸 (高知県)

図1: 国内サービスラーニング実習サイト



- 1. ボゴール (西ジャワ州)
- 2. トゥガル (中ジャワ州)
- 3. パントウル (ジョグジャカルタ特別州)
- 4. グヌン・キドウル (ジョグジャカルタ特別州)
- 5. スプルモンデ諸島 (南スラウェシ州)

図2: 海外サービスラーニング実習サイト

んでした。しかし、だからこそ参加したいと思いました。居心地のよい、自分の得意な分野だけにとどまらずに、関心分野がまったく違う人や、宗教の異なる人、人種や母語の違う人と交われるとてもよい機会だと思ったからです。」(法文学部1年、Aさん)

「(受講動機の)1つ目は、僕が島根県出身だということです。島根県には原発があります。また高齢者の割合が3割を超す顕著な高齢化社会です。そのような数々の問題を抱えるところで生まれ育った僕は、いずれ島根県に戻り、地域課題の解決に貢献できたらなと思っています。そのために様々な問題や課題を抱える地域に出向き、実際に見て、感じて、仲間や先生方と共に解決を目指していくことでこれからの自分の目標をかなえるためのヒントをもらえるような気がしています。」(農学部1年、

Tくん)

以上は、履修希望の学生が提出している受講動機レポートからの抜粋である。受講動機には、Aさんのように、「海外に行ってみたい」「自分の視野や可能性を拡げたい」「異文化を体験し、コミュニケーション能力をつけたい」「国際協力に携わってみたい」といった海外志向、Tくんのように、「地元に貢献したい」「そのための力をつけたい」といったローカルな志向が共存している。

学部も志向も異なる学生たちが、四国とインドネシアの農山漁村で、インドネシアの学生と共に学びあう。彼らは何を経験し、学び、地域に何をもたらしていくのだろうか。

3-2. 国内サービスラーニング: 四国の農山漁村での出会いと体験

国内サービスラーニングの各実習サイトでは、日・伊の学生計15～20名と引率教員1名が10日あまり滞在し、寝食を共にする。宿泊場所は多くの場合、地区の公民館や集会所である。寝袋を持ち込み、基本的に自炊しながらの共同生活である。

学生間の共通言語は英語だ。日本人学生はインドネシア学生の「耳」「口」となり、地域の方々との間を通訳する役割も担う。活動は自分たちの発見や気づきをもとに、学生たちが地域の方々に相談しながら組み立てていく。言いたいことが英語で表現できないもどかしさを痛感しながら、学生たちは連日深夜まで議論を重ね、活動を計画し、取り組んだ活動の意味を振り返る。



地域を歩き、お話を聞く(明浜地区にて)。日本学生は通訳の役割も果たす

インドネシアの学生にとって、高齢者が一人で暮らし、若い世代にほとんど出会えない日本の村の状況は「驚き」である。なぜ、若者は村を離れるのか、高齢者は一人で

大丈夫なのか、このままいくと村はどうなるのか。インドネシア学生の素朴な問いは、日本の学生たちにとって、日本の社会が歩んできた道を見直し、自分の立ち位置を改めて考える機会となる。中でも、地域で自分たちは何ができるのか、^{よそもの}余所者としての立ち位置をめぐっては、日本・インドネシアの学生間で真剣な議論が続く。

「高齢化、人口減少、少子化、空き家の増加など、問題を解決したいという思いから、自分たちのアイディアを出し合いました。でも、はたと気づきました。私たちにはそれらのアイディアに対して責任がありません。私たちは地域外に住む学生ですし、実際に動くのは地域の人になってしまいます。」(法文学部2年、Aさん)

学生たちが悩み、議論し、実施できた活動は、荒地や排水路整備のお手伝い、インドネシア文化交流会、1日コミュニティ・カフェの開設、ガードレール磨きなど、細やかなものだ。それでも、学生たちが真摯に取り組んだ活動が地域の人々の目に触れることで、差し入れをいただいたり、泊めていただいたり、地域の人々との間に予想していなかった交流が生まれ、「またおいで」といわれる関わりが育まれていく。そうした関わりが、後述する学生の自主的活動へとつながっている。



1日コミュニティ・カフェでの多文化交流（蔦刈地区にて）

受入側の地域にとっても、学生の受入はまさに異文化交流である。当初、「学生さんたちが来てくれても何もできませんから」と受入に消極的だった地域や、イスラム教徒が多いインドネシア学生の受入に不安を示される地域もあった。しかし、受入後は、「(学生受入に) 地域も対応できる」との感覚をもたれたり、「学生さんたちから多くの元気、勇気をもたらしている」「地域を見直し、誇りをもった」「ぜひまた来てほしい」などの高評価を何人かの方々からいただいた。国内サービスマーケティング

は、地元にいながらにして、インドネシアと若者という「異文化」がやってくることで、地域を見直し、地域の力を引き出す機会となっている。

3-3. 海外サービスマーケティング: インドネシアでの出会いと体験

海外サービスマーケティングの活動の流れは国内サービスマーケティングとほぼ共通している。日本学生にとって大きく異なるのは、インドネシアという異文化に身を置くということだ。学生たちは、日本車の多さと渋滞に驚き、急激に経済成長するインドネシアを実感する。実習サイトにつけば、村人と子供たちに囲まれ、濃密な人間関係、自然が身近にある暮らしぶりを体感する一方で、村々に押し寄せている様々な社会変化とグローバルなつながりを目の当たりにする。学生たちが共通して驚くのは、村のゴミ問題である。プラスチック包装やカン、ペットボトルを使った商品が村に浸透する一方で、分別や処理のシステムはないに等しい。ゴミ問題の解決は、学生たちの主要な活動目標の一つとなっている。



地域のゴミ問題の改善を目的に、生ごみからコンポストづくりに取り組む（インドネシア）



村の子供たちとゴミ拾い活動

村での宿泊は、いくつかの家々にわかれてのホームステイだ。インドネシア学生の手助けを借りながら、片言

のインドネシア語と身振り手振りでコミュニケーションをはかる。当初欲しいと思っていた「冷たい飲み物、クーラーのきいた部屋、トイレトペーパー」が「なくても何も困らない」ことに気づく一方で、鶏を絞めて「命をいただく」経験などから、人間が生きていくために不可欠なことは何かを考えはじめることとなる。

「好奇心」「挑戦する気持ち」「根本が存在する豊かさ」「違いを楽しむ」「人のつくる風景」「協同」。帰国時に、海外サービスラーニングを通して得たことを学生が一言で書き表した用紙には、インドネシアの農山漁村という場が、学生に与えた経験の豊かさが表れている。



地域調査を終えて、自分たちの発見を議論し、活動を組み立てていく（インドネシア）

3-4. 学生たちの自主的活動の展開

以上のような SUIJI-SLP を通じた出会いと経験は、学生たちによる様々な自主的活動を生み出している。愛媛の明浜では、みかん収穫の手伝いを「ボラバイト」と

名付け、広く他の学生にも呼びかけて進める活動が動き出した。蔣淵では、地域の子供たちを対象にした海の環境教育番組の制作に学生たちが関わったり、海産物を大学の食堂でプロモーションするなどの取り組みが生まれた。香川の小豆島では、学生たちが「棚田発！日本ここのプロジェクト」を組織し、棚田保全にあたる活動が進んでいる。地域の祭りやイベントに学生が手伝いに行くといった活動は各サイトで展開している。インドネシアでも、地域の女性たちがゴミとなったプラスチック包装を折って編み込んで作った財布やキーホルダーを、インドネシア学生たちが「オリゴミ」と名付けて販売支援する活動が始まった。また、インドネシアの学生の間からは、単なる観光旅行ではなく、SUIJI-SLP のような農山漁村での学びの旅を日本とインドネシアで企画する会社を立ち上げる夢もあがっている。



プラスチック包装紙を活用した「オリゴミ」の制作（インドネシア）



2013年度の海外サービスラーニング参加者が一堂に会した SUIJI-SLP セミナー（2014年3月14日、ポゴール農業大学）

SUIJI-SLPに特徴的なのは、こうした各地のローカルな活動状況が、LINEやFacebookなどのソーシャルメディアを通じて、日本・インドネシアの学生間で、瞬時にグローバルに発信・共有されていくことだ。写真や投稿をみた学生たちが、英語や、時に日本語、インドネシア語を織り交ぜてコメントが入ることは、活動への後押し、刺激となる。

サービスマーケティングをきっかけに、インドネシアへの長期留学に踏み出した日本学生もいる。受講動機レポートに、「インドネシアに行くということは考えたことさえなかった」と書いていたAさんは、アドバンスドまで進んだのち、文部科学省の「トビタテ！留学JAPAN」の奨学金を受け、3年次にインドネシアに1年間の留学を決めた。インドネシアの山村でエコツーリズムを企画実践しながら学んでいる。彼女にとって、インドネシアの村も愛媛の村も同様に大切な「第二の故郷」であり、将来は愛媛を拠点に農山漁村のよさを伝えるツーリズムを創ることが目標だという。

こうしたSUIJI-SLPの学生たちの姿から見えるのは、ローカルにこだわる、ローカルに根があるからこそ、グローバルにつながり、行動することが楽しくなる、そういった“グローカル”なつながりである。

4. 異文化交流を通じた地域未来づくり

SUIJI-SLPの過去3年間の取り組みを経て、筆者らは、地域の未来を創るには、異文化交流が不可欠だと確信している。大学教員という立場でいえば、それは、地域の人々と共に地域から地域・日本・世界の未来を創る若者を育てるということだ。学生を受け入れた実習サイトの方々も、未来を創る若者を育てているという感覚を持たれたのではなかろうか。学生が地域で実施した活動自体だけではなく、それも、受入に対する高評価につながる要因となったのかもしれない。

SUIJI-SLPの取り組みから見えてきたことは、グローバルとローカルは対立するものではなく、ローカルに根ざすからこそ、グローバルにつながるができる、ということである。ここでいう、ローカルに根ざすとは、実際にその地域に暮らすという意味だけではなく、地域と関わりを持ち、何か選択したり、決断したり、行動するとき——買い物をするといった小さなことから、人生

の選択にいたるまで——に、地域のことが頭にある、地域を足場として物事を考えている、といった生き方も含めておきたい。SUIJI-SLPの参加学生の中には、出会った地域と関わり続けていくためには、将来どういう選択をしたらよいか、迷い、相談にくる学生もいる。

地域にどういう足場が作れるのか、どう地域と自分は関わるのかが見えてくるためには、自分自身を見つめなおすこと、そしてそのためには、異文化交流、つまり、自分を映し出してくれる「他者」「異文化」の存在が不可欠である。インドネシアに行くだけでは、自分は見えてこない。自分とは異なる考え方や文化に触れ、想像もしていなかった状況や事柄を知り、自分の「当たり前」が揺らぐような経験をしたとき、人は自分自身を掘り下げ、見つめなおすことができる。

これは、地域の側にもあてはまるのではないか。地域に余所者が訪れる、加わることで、地域の「当たり前」が少し揺らぐ。揺らぐことで、無意識であった「当たり前」を意識すると同時に、将来に向けてどうするかを考えるきっかけとなる。その意味で、異文化交流は、地域の人々がローカルに根をはりながらも、グローバルに多様な人々とつながる、開かれた地域づくりにつながるはずである。ローカルに根ざしながら、グローバルに開かれた地域の未来づくりに関わる若者を、地域の方々とともにこれからも育てていくことが、SUIJI-SLPの目標である。そのためには、文部科学省の補助が終了した後もプログラムを継続させる基盤をつくること、そして、これまでの学生の学びや変化、地域に与えた影響を、より具体的、包括的、継続的に捉えて検証し、プログラムの改善につなげていくことが次のステップに向かうための課題だと考えている。

Profile 島上 宗子 (しまがみ もとこ)

愛媛大学 SUIJI 推進室 特定教員 (准教授)・副室長
一般社団法人あいあいネット 副代表理事
津田塾大学学芸学部卒業
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程 単位取得後退学
愛媛大学大学院連合農学研究科 学位取得 (博士 (学術))

Profile 小林 修 (こばやし おさむ)

愛媛大学国際連携推進機構・准教授
アジア・アフリカ交流センター・副センター長
SUIJI 推進室・副室長、モザンビーク交流推進班・副班長
北海道大学農学部林産学科 卒業
北海道大学農学研究科博士課程林産学専攻 修了 (博士 (農学))